

まえがき

武士道とは、思想というよりも明らかに倫理であり、さらに突き詰めていえば、倫理というよりも濃厚に美学であるということが出来ます。自分の考えや行動、つまり生き方を美しくするのが武士道であり、かつて多くの武士たちは、世に美しく生き、美しく死ぬことを切望しました。武士たちのこの願いはいろいろな形で書き残されていますが、水戸徳川家の藩祖である徳川頼房は、

「美を己に専らにし、過ちを人に帰する勿れ」

という残していますし、有名な武士道書『葉隠』の口述者である山本常朝は、

「侍たる者は、まづ礼儀正しくしてこそ美しけれ」

と述べています。侍はいかなることがあろうとも、常に美しくあれというのが、武士道が求めた第一要件でした。いかにも侍らしい颯爽たる立居振舞いの美しさばかりでなく、精神の美しさをも、武士道は侍たちに求めたのです。

翻つて現代の日本を考えてみますと、ファッションやエステといった見た目の美しさ、即ち外面の美は追求するのですが、心の美しさ、即ち精神の美の追求がおろそかにされているといわざるを得ません。これが現代人の精神の荒廃の非常に大きな原因

になっていきます。たとえば、リストラという名のもとに弱い立場の人々の首を平然と切っていささかも恥じる所のない効率万能主義、物事を損得勘定で割り切って、金儲けに成功した人を勝ち組と称える拝金出世主義、周りの人々の幸福よりも自分さえいい暮らしができればよいとする自己第一主義、さらに情報に踊らおどされているとも知らず、何かのブームが始まるとワツとばかりに群れをなす、自主性のまるでない付和雷同主義、等々が現代人の精神の荒廃の主因となっています。

そして重要なことは、これらは皆、精神の美と行動の美を追究する武士の太いに嫌うところであり、逆の言い方をすれば、武士道の何たるかを感じずれば、現代人の精神の荒廃に歯止めをかけることができるということです。民族精神の核として一千年の長きにわたって日本人の心の支えとなった武士道にはそれだけのパワーがあり、このパワーを利用しないという手はありません。

そしてこのパワーを身につける最善の方法は、武士道美学が凝縮された名言を繰り返し音読することであり、「読書百遍、意自おのずから通ず」といわれるように、音読を反復することによって、いつしかいかにも侍らしい強靱な精神を血肉とすることができようになると思います。しかもこの強靱な精神に支えられて、言行もまた颯爽さっそうとして美しいものとなり、他人の眼などを気にすることなく、一回限りの大切な人生を、誇り高い侍のように堂々と歩むことができるようになるのです。

そのため、本書ではこれぞ武士道美学の典型といえる名言を厳選しました。ただし江戸期に板行された武士道書はおびただしい数にのぼるので、戦前の文検、即ち旧文部省による教員検定試験の「国民道徳要領」に記載された左記の必読武士道書を本書の基本文献としました。

『武教小学』『山鹿語類』（山鹿素行）、『武事提要』（山鹿高恒）、『武治提要』（津軽政方）、『武道初心集』（大道寺友山）、『翁問答』（中江藤樹）、『集義和書』（熊沢蕃山）、『武訓』（貝原益軒）、『武士訓』（井沢蟠龍）、『明君家訓』（室鳩巢）、『士道要論』（斎藤拙堂）、『武学啓蒙』（力丸東山）、『武道便蒙録』（須賀井政秀）。

本書ではこれらの書を網羅して名言を掲載した外に、追加文献として、左記の武士道書からも士魂烈々たる凛烈な名言を採録しました。

『葉隠』（山本常朝）、『学則』（林子平）、『仮名性理』（藤原惺窩）、『武家小学』（高林政明）、『兵術要訓』（安建正寛）、『武学拾粹』（星野葛山）、『神武権衡録』（松下郡高）、『尚武論』（中邨元恒）、『忠孝通義』（本多正親）、『武備小学』（伊奈貞昭）、『肝要工夫録』（鶴殿長快）、『士道心得書』（北条竹鳳）、『武家拾要記』（山本屠龍軒）、『匡正論』（本多忠篤）、『下学老談』（富田景周）、『止戈弁論』（佐久間健）、『駿台雑話』（室鳩巢）。

以上の基本文献と追加文献で、江戸期の著名な武士道書はほとんど網羅していますので、本書に採録した名言の数々を繰り返し音読すれば、武士道精神の真髄に触れる

ことができ、それがいつか読者諸兄妹の血肉となって、明日を生きる強力な心の糧となることを願って止みません。

北影雄幸